

漱石は町方名主の家に生まれたが、世の中では戊辰戦争が始まり生家も没落し始めていた。さらに子沢山の上、高齢出産で母の母乳が出なかったため、古道具屋（一説には八百屋）に里子に出されたが、夜遅くまで店先に置かれている漱石を不憫に思った姉が連れ帰り、その後子供のいない塩原家の養子となった。そこで養父母は互いに漱石を自分になつかせようと、真の愛情ではなく物を与えて彼の気を引いた。漱石の心は金の力で縛られた。ところが養父母の離縁により贅沢生活に影がさす。学校を辞めて働きに出されては大変と、成長してから実家に戻る事となった。そこで没落前の裕福な生活感覚のまま没落した実の兄姉と自分の違いを意識することとなる。そこで漱石が見たものは、社会的金銭価値の変化流動に対応できない人の人生の変転だった。

折しも世の中では日清・日露戦争後の利潤獲得競争が始まった。財産家に限らず一般民が儲けるチャンスが巡ってきた。その中で漱石は高等遊民が財産相続に頼れなくなる状況をよく描いた。競り上がる欲得の中で、戦いを知らぬ彼らが財産を失ったとき、人生の自由は幻となる。自由とは正しい個性の実現による自らの人生の構築の上にある。金に所有されるな、金を所有せよ。金の奴隷になって一生命を流浪するより、金の主人になって一己の人生を究めよ。

漱石は金銭に几帳面だった。それが他人に自分を所有されずに、自分を自由に発現できる基盤である。